学校の中の「ほっと相談員」

富山県富山市

地域の状況

◆　富山県富山市藤ノ木地区　人口 13,539 人、世帯数 5,111 世帯
◆　小学校　1 校（児童数　787 人）、中学校　1 校（児童数　350 人）
◆　児童委員数　20 人、主任児童委員数　2 人
◆　概況　藤ノ木地区は富山市の東地区にあり、暴れ川で有名な常願寺川の西側に面した住宅地域であり、大きな工場や商業地帯はなく、静かな地域である。近年、住宅地の造成が盛んであり、世帯数及び人口の増加が顕著になっている。

活動内容等

１．カウンセリングルームの空き時間を活用して・・・

富山県富山市藤ノ木地区民生委員児童委員協議会では、中学校と連携し、学校内に児童委員・主任児童委員を相談員として配置することにより、児童との交流を図っている。

藤ノ木中学校のカウンセリングルームでは、毎日、昼休みの時間帯に、地区の児童委員、主任児童委員が務める「ほっと相談員」が子ども達がやって来るのを待っている。カウンセリングルームには、いすに座りきれない子どもたちのために座布団が用意され、囲碁やトランプで遊んだり、マンガを読むこともできる。給食後の休憩時間には、４０人近くの子どもたちが集まることもある。子ども達は、相談員とゲームをしたり、グチを聞いてもらったりと、リラックスして過ごす。

地区内２２人いる児童委員、主任児童委員が１日１名、当番制で毎日カウンセリングルームに相談員として待機している。スクールカウンセラーの先生のアドバイスを受けながら、子ども達にとって、「気を許せる場所、本音が出せる場所、気分転換になる場所」づくりに努めている。一方、児童委員にとっても、「ほっと相談員」の活動から今の中学生の現状把握にもつながり、児童委員の本来の活動のメリットにもなり、刺激にもなっている。藤ノ木地区民児協では、小学校でも同様の取り組みを行っており、地区の小学校では１年生の児童と交流を図る「ふれあいタイム」を行っている。

２．活動のきっかけ・経緯

平成１３年１２月の民生委員・児童委員改選時に主任児童委員が２名となり、藤ノ木民児協においては、今まで以上に子どもたちの健全育成のための活動を深めるには、どのように進めていけばよいかと執行部で検討を行った。この時の案の中に「もっと学校の中に入っていくべき」との意見があり、そのためには、どのような関わり方があるのか話し合いを行った。当時、中学校にはスクールカウンセラーが配置されていたが、カウンセリングルームは、カウンセラーのいる週１日しか使われていなかった。また、子どもたちは成績などに直接関係のない保健室の養護教諭や図書館司書のところに集まっていた。このため、カウンセリングルームの空いている時間に児童委員がいてもいいのではないかと主任児童委員が提案し、民生児童委員の定例会で話し合い、他の児童委員からも賛同を得た。主任児童委員から校長先生にこの旨話ししたところ、校長先生が「ほっと相談員」という名前をつけてくれ、平成１４年４月からほっと相談員によるカウンセリングルームの開放が始まった。

３．事業実施にあたって工夫した点、苦労した点、立ち上げ時のポイント等

⑴　苦労した点

事業開始当時、「ほっと相談員」として活動できる委員を募った際、中学生とどのように接すればよいかわからない、自分の一言が影響を与えるのではないか等、不安を感じる委員もおり、有志１２名から始めた。平成１７年からは、民児協の事業として位置付け、当時の２１名の全委員が当番制で活動することとし、現在に至っている。

⑵　工夫している点

①　学校との関わり方について

ほっと相談員は、その日の参加数やふれあいの中での感想等、活動日誌を毎日つけている。それに対し、学校からも丁寧なコメントを記載してくれている。この日誌は学校とのつながりを深め、互いに理解していくのに大事なものとなっている。

②　生徒・保護者へのＰＲ

事業開始当時は、全校集会の時に顔合わせを行ったり、顔写真を「ほっと相談員」の教室の入り口に掲示し、ＰＲを行った。この３学期の終了時には、「校長室つうしん」の中で紹介される。

入口には、当番の相談員の氏名を掲示しています

⑶　今後の課題

「ほっと相談員」は、カウンセラーの先生に研修を受けているが、全相談員が共通の意識を持って生徒達に対応できるよう研鑽を積む必要があり、特に生徒の心理について理解力を高めたいと考えている。生徒達が今まで以上に気分転換ができる、心地よく集える部屋になるよう、皆の要望を聞きながら継続していきたいと思っている。